

アグネス吉井「みうしない」

木村 晶彦（きむら あきひこ）

「アグネス吉井」はユニット名で、**KEKE**（男性）と白井美咲（女性）のペアである。困ったことに私には、男と女が何かしていると、たちどころに恋愛を妄想する悪癖があるのだが。

ともかくにも、非常に図式的かつ幾何学的なダンスである。またペアダンスとはいうものの、踊り手の動作は完全にシンクロしてはおらず、揃うようで揃わない。そうかと思えば、揃わないようで揃うときもある。観る者にすればもどかしい。やきもきさせられる。

抽象的で具体性に乏しい分、このダンスにはどうとでも解釈できる余地がある。私の脳裏をかすめたのは、とある映画主題歌の冒頭部分の一節であった。『トラック野郎』シリーズの主題歌、『一番星ブルース』の1番冒頭。

男の旅は一人旅

女の道は帰り道

しょせん通わぬ道だけど

惚れたはれたが交差点*

菅原文太のドスが利いたボーカルは、この際聴かなかったことにしよう。歌詞のほうにご注目いただきたい。作詞は阿木燿子である。阿木の歌詞は、明快かつ図式的だ。阿木は男女の関係を、詞世界を道具立てとし、図式的に明示して見せる。

十字にクロスする「交差点」。たった一語に顕現された、図式的な男女の関係。あの日演者のアグネス吉井がやろうとしたこと、やって見せたことそのものではないだろうか。

男と女が息を合わせ、助け合い支え合おうとするものの、行き違いすれ違う場面も多々あった。男は女を置き去りにして部屋（ホール）から出て行った。少しして男は戻ってきた。お返しとばかり、女が男に愛想を尽かし、男のことなどそっちのけで、水の入ったペットボトルを、シャカシャカ振り出すくんだりもあった。

これは、フィギュアスケートのペアダンスやアイスダンスとは異質である。フィギュアスケーターは、荒い息をしながらも、時としてこやかに、時として悲しげに、調和のとれたパフォーマンスで、観衆と審査員にアピールをする。

アグネス吉井のペアダンスに、その種の調和を読み取ることは難しい。むしろ不協和を感じてしまう。そこが食い足りないと言えば食い足りない。これを男女の関係と読み替えるには、いささか情熱に欠けるという見方も成り立つ。

であればこそ、このダンスには意味がある。かねてから演者は、劇場空間を外部へと出す試みを実践している。今回のパフォーマンスに関しても、観衆には「ボーッとされていてほしかった」「集中させる気はなかった」と述べている。

演者は意図的にダンス会場の扉を開け放ち、外気を取り込もうとした。外の世界とつながろうとした。京都芸術センターは元明倫小学校だ。試演日が日曜日ということもあり、元小学校の校庭からは、テニスに興じる人々の歓声が聞こえた。ラケットでボールを打つ音が聞こえた。

平素から演者は「公園で5分間音を聴く稽古をしていた」「公園を行き来する人々を観察していた」とも述べている。公園は公共空間であると同時に、行き交う人々の生活空間でもある。

あの日、あの時、あのタイミングで、テニスの音が聞こえたことが、計算づくかどうかは知らない。偶然だったのかもしれない。だがそれは恐らく些細なことなのだ。その場所に人々がいて、思い思いのときを過ごす。そのことに偶然も必然もないだろう。

人には人の暮らしがあり、男女には男女の暮らしがある。男と女はよりを戻し、喧嘩と仲直りを繰り返し、二人の時間を生きるのみ。ことさら観客を煽ることなく、外部環境を客観視しているとも言えようか。となると現代的といえれば現代的。温かさと冷たさの狭間に切り立つパフォーマンスだ。

劇場の外部空間と内部空間を統合すると、現代人の生活史が見える。とある男女の生活史が見える。男と女はあるとき出会い、破局の危機を乗り越えて、所帯を持つところまで漕ぎつけた。結婚生活3年目～5年目ぐらいの、年若い夫婦の生活を、最後は覗き見した気になった。

*鈴木則文『トラック野郎風雲録』（2010年）「主題歌は娯楽映画の花道を飾る」102ページ